



受難の主日(枝の主日)(ルカ 2:16-21)

本当に、この人は神の子だった

「本当に、この人は神の子だった。」(27・45) これは百人隊長の言葉です。百人隊長の信仰告白で物語を終えています。弟子の一人の信仰告白とか、イエスのそばを離れずにいた母マリアやその他の信仰者の告白ではありません。何か、これまで見過ごしていたものがここにあるのではないかと。そういう思いで取り上げてみました。

百人隊長は、おそらくローマ人であり、ユダヤ人ではありません。ユダヤ人ですら、指導的立場にある人たちはイエスを信じようとせず、死に追いやりました。しかも重罪人としてです。このイエスを、百人隊長は、一連の出来事を踏まえて、「本当に、この人は神の子だった」と結論づけたのです。

百人隊長の仕事はどんなものだったのでしょうか。百人の部下を統率、指揮し、訓練によって軍隊の規律を維持していた人です。「軍団の背骨」と言われることもありました。そういう任務にあるのですから、当然理性的な人であることが求められます。感情的に行動せず、客観的に、また冷徹に任務を遂行する人です。

もし百人隊長に、何かの命令が下れば、部下を使ってその命令を確実に実行します。基本的にどんな命令であっても、です。「この命令に従っても良いのかな」とか考えません。その百人隊長が「本当に、この人は神の子だった」と証言した、信仰告白したことが非常に意義深い。私たちはこの点を、ひょっとしたら今の今まで見落としていたのではないのでしょうか。

決して情に流されず、理性的に物事を判断し、行動する。その人の目をもってしても、「本当に、この人は神の子だった」のです。情に流される人の言葉や、カネを渡せばどうとでも証言する人や、いろんな人間関係を考慮して言う人の言葉ではなく、常に公正・真実を述べる人が、「本当に、この人は神の子だった」と証言した。信仰告白した。これ以上の立証をできる人がいるのでしょうか。百人隊長に証言させた福音記者には、明らかに狙いがあったに違いありません。

百人隊長にこれほどの信仰告白をさせた力は何でしょうか。「百人隊長や一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、言った。」(同 54) 「恐れ」が信仰告白の力の源でしょうか？ 恐れで、人は大胆になれるのでしょうか。私は別の何か、彼に大胆な信仰告白をさせたのではないかと考えています。あくまでも思い巡らした結果です。

ローマ帝国が支配している領土に軍隊を置くのは、暴動を鎮圧させるためです。実際、イエスと一緒に十字架に磔にされていたのは二人の強盗です。ルカ 23 章 19 節によれば、バラバは暴動と殺人のかどで投獄されていた人でした。バラバはもちろんです、イエス様も、いつか暴動を起こすかもしれないと宗教指導者に睨まれ、この百人隊長の監視下

にあった人かもしれません。

すると、先週のことが思い出されます。イエス様はラザロをよみがえらせています。このイエスは、暴動を警戒する百人隊長にとっては十分警戒対象になり得たと思います。暴動を起こさなければ手を出しませんが、一旦暴動を起こせば制圧する。付かず離れずの距離で見張っていたのかもしれません。もしこの場面でも群衆に紛れて立ち会っていたのなら、彼も「ラザロ、出てきなさい」という声を聞いたことでしょう。

百人隊長は「命令に従う」「情に流されない」という縛りがあります。本来なら、決してそこから出ることは許されません。しかし彼は、イエスの最期に起こった地震やいろいろの出来事を見て、命令の縛りから出てきました。感情に流されてはいけないのですが、自分の本当の感情を言葉にしました。イエスの「ラザロ、出てきなさい」は、百人隊長にも響いていたのではないのでしょうか。

私たちは、イエス様がお亡くなりになったことは私たちの救いのためであることを知り、理解しています。しかし、さまざまな縛りのために、イエスが十字架につけられ、人類を救ったことを私たちから告げられても、「本当に、この人は神の子だった」と言えないでいる人がいるのではないのでしょうか。

そうであれば、私たちは、その人に響くような「ラザロ、出てきなさい」を伝える工夫が必要になります。私たちにはイエス様の十字架上の死を仰ぎ見て、しなければならぬことがはっきりしたのです。それは、私たちのように信仰を表明したくてもさまざまな縛りで表明できずにいる人に、その人に伝わる言い方で「ラザロ、出てきなさい」と背中を押してあげることです。

あなたの夫・妻は、カトリックの信仰を表明したくてもなにか縛りがあるって身動きが取れないでいるのではないのでしょうか。その背中をそっと押してあげるのは、配偶者のあなた、また家族のみんなです。イエスは十字架にかけられるまでの歩みの途上で、「ラザロ、出てきなさい」と言ったのです。この言葉が現代にも響くために、あなたのお手伝いが必要なのです。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)



聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

わたしの足など、決して洗わないでください

私が出会った先生・教授の中で、嫌いだった先生はカナダ人の倫理神学の教授でした。理由ははっきりしています。重箱の隅をつつくような問題を出すからです。勉強する側からすれば、学んだことの中核部分がおそらく問題に出るだろうと網を張って準備をします。しかし教授は私たちが予想しなかった部分、絶対に問うはずのない部分を問うてきました。

本人の答弁はこうです。「神様の学問に、これは重要である、これは重要でないなどという違いはありません。すべて重要です。」言いたいことはわかります。教授の試験問題をイチゴに例えると、「イチゴは先端部分と根元の部分、どちらが甘いでしょうか」これは誰もが想定するわけですが、教授は「イチゴのヘタは、何枚あるでしょうか」というような問題を出してきたのです。「そんなこと知るか」と私たちは問題を見て教授を恨めしく思っていました。

ペトロは、イエスが弟子たちの足を洗う中、イエスに言いました。「わたしの足など、決して洗わないでください。」(13・8) 弟子と師の間で、足を洗ってもらうなど、絶対に受け入れられなかったのです。絶対に起こるはずのないことが目の前で繰り広げられている。弟子と師の関係で中心部分になり得ないことを、イエスは中心部分として取り上げている。学生当時の倫理神学の教授のことを思い出したのです。

ただ、イエスがなされたことは、イエスにとってはちゃんと説明が付きまします。「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」(13・7) 確かに理解できない行動です。しかし、「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」(13・14-15)

師匠が弟子に対して膝をつくことはしませんが、師匠の殻を破れば、可能かもしれません。先日司祭叙階式が行われ、ミサの終わりに新司祭はご家族に祝福を与えましたが、それに続いて中村大司教様も、「新司祭の祝福を、しもべであるわたし、大司教にも与えてください」とおっしゃって、新司祭の前に膝をついたのです。

そこには、名誉大司教もいました。17年間司教職を務めた名誉大司教は、記憶する限りそんなことは決してなさいませんでした。司祭団が教区の内外から100人ほど来ていました。他の司祭はどう思ったかわかりませんが、中村大司教が新司祭の前に膝をつく様子は、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」どころか、未だに分かりません。私に力が足りず、分かろうとしないから、分からないのかもしれませんが。

ただ、「後で、分かるようになる」その時が来ることを信じたいと

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

思います。今年の聖木曜日も、洗足式を行います。中田神父は信徒の足を洗うことを「努力」とも「謙遜さの表現」とも思っていません。「儀式」だと思っています。その昔、洗足式のメンバーの中に、私にとって腹立たしい人が混じっている洗足式がありました。いつも意見が対立する人でした。それでも、努力してその人の足を洗ったわけではなく、儀式と思っていたので何ともありませんでした。

きっと、中田神父は「儀式」という縛りの中で洗足式をしているのだと思います。そんな私にイエスは今、大声で言いたいでしょう。「ラザロ、出てきなさい。」「儀式として割り切って足を洗ううちは、わたしのしていることは、今あなたには分かるまい」そうおっしゃっていることでしょうか。私も、何かの縛りに置かれていて、殻が破れないままでいる。殻を破らない限り、イエス様のしていること、中村大司教様のしていることが、理解できないのでしょうか。せめて中村大司教様が引退されるまでに、大司教様の思いを汲み取れる司祭になりたいと思います。

今年も、洗足式が控えています。私は今この時点でも、何かの縛り、何かの殻を打ち破れていません。それが何なのか、今晚だけでなく、復活祭の日まで考え、思い巡らしてみたいです。それが何なのか理解できたとき、同じ動作をしてもイエス様の深い思いが宿り、「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」（13・1）あの境地に近づけるかもしれません。

聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)

聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか



皆さんは「この人と同じに見られたくない」「この人と同類と思われたくない」という人がいるのでしょうか。組織が大きくなってくると、そういう人たちがちらほら現れるかもしれません。ペトロは、イエス・キリストと同じに見られたくないと、はっきり言ったのです。「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」「違う。」

中田神父にも、同じ人種と見られたくない人がいますが、その人は重い病を得てしまいました。長年、「あいつと同じに見られたくない」と思っていた人です。複雑な気持ちです。本当は今でも、「あいつと同じと見られたくない」と思っていますが、病の重さ、深刻さを考えると、助けてあげたい、力になりたいという気持ちもあります。

ペトロは、面と向かって「違う」と言い張りました。イエス様から「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府（よみ）の力もこれに対抗できない」（マタイ 16・18）とまで信頼を得ていたのに、その信頼を覆し、裏切ったのです。ペトロは後悔し、すぐに「あなたを愛しております」（ヨハネ福音書 21 章）と答える人になりました。中田神父は「あの人とは違う」と考えていた人が重い病を得るまで何十年も、恥知らずにも「同じ」であることを認めようとしなかったのです。

イエスは、自ら十字架を背負いました。一体誰のためですか？恥知らずにも「あの人とは違う」と言った私のため、また私たちのためではありませんか。十字架の重さに三度倒れたとしたら、それは誰のためですか？何十年も、相手を認めようとしなかった私のためではないですか？同じように、「あの人と同類にしないでいただきたい」と拒む、私たちのためではないのでしょうか。

なぜ、イエス様は十字架から降りないのでしょ。うか。「あの人と私とは違う」と今も言い張る人がいるからでしょう。なぜイエス様は、十字架の上で亡くなられたのでしょうか。私たちが、自分の力では自分を縛っている鎖を断ち切ることができないからです。自分を縛っている鎖、この縛りから私を救ってくれる言葉は何だったのでしょうか。「ラザロ、出てきなさい」あの叫びでした。イエス様しか成し遂げることのできない救いのわざが、私たちが縛っているものから解き放ってくれるのでした。

イエスは「成し遂げられた」と言って頭を垂れて息を引き取られました（19・30）。「ラザロ、出てきなさい」と大声で叫んだイエスが、今は「成し遂げられた」と言われます。自分の力では罪を認めることができない私たちに代わって罪を背負い、すべての縛り、人を不自由にしている鎖を断ち切ってくださったのです。イエスのおかげで、「違う」と言い続けてきた自分の罪を、ようやく認めることができました。

罪を認めましたが、罪は赦されるのでしょうか。何十年も認めよう

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

としなかった罪が赦されるはずがありません。ですからイエスは、十字架の上で命をおささげになったのです。誰も、自分の犯した罪を赦すことができないので、イエスがいけにえの子羊となったのです。

「世の罪を取り除く神の子羊。」ほんの数年前までは、この部分は省いて言っていました。「神の子羊の食卓に招かれた人は幸い。」せっかく「世の罪を取り除く神の子羊」この部分も唱えるようになったのですから、今日こそ、罪を悔やみましよう。今日こそ、このあわれな私を救ってくださるイエス・キリストに心から感謝しましよう。

そして、私を救ってくださるのはあなただけです。この信仰をどんな時でも、どんな人にも伝えましよう。今日私たちのために命をささげてくださいましたイエスが、復活して勝利を得ます。勝利を得るお方は、私たちすべての罪を背負い、十字架上で亡くなられたイエス・キリストただ一人なのです。これから、十字架の礼拝に移ります

復活徹夜祭(マタイ 28:1-10)



復活徹夜祭 (マタイ 28:1-10)

わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい

主の復活おめでとうございます。今年の聖なる一週間を貫くテーマとして中田神父が選んだのは、「ラザロ、出てきなさい」そして「ほどいてやって、行かせなさい」でした。そして今日、主イエスは復活し、人類を縛っていた罪と死の縄目を解いてくださいました。主は決定的な働きをなさいましたから、あとは私たちに「ほどいてやって、行かせなさい」という使命を託そうとされます。一人ひとり、復活の主が託そうとする使命を持ち帰ることにしましょう。

マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行きます。そこで見たのは稲妻のように輝き、雪のように白い衣をまとった天使でした。番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになったとあります。二人の女性にとっても、同じくらい恐ろしくなったと考えて良いでしょう。そこで天使が「恐怖」でぐるぐる巻きにされた二人の女性を「ほどいて」あげます。

「かねて言われていたとおおり、復活なさったのだ。」 (28・6)

「恐怖」からほどいてもらった女性たちは、「恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走っていった。」

(28・8) 彼女たちには使命が託されました。最終的にもう一度、イエス様からも同じ使命を託されますから、本当の意味で使命を託すのは常に復活したイエスということになります。

この時点で弟子たちはどうしているのでしょうか。日中のミサの福音朗読を先取りすると、どこかにとどまっていたようです。いつでも動けるように「待機」していたのではなく、弟子たちも恐れに捉えられ、縛り付けられていたのです。それを、婦人たちが「ほどいてやって」ガリラヤへ行くように促します。エルサレムからガリラヤまで170km以上ありますが、当時は徒歩で数日を要する距離でした。弟子たちはまだ、イエスの「ラザロ、出てきなさい」という叫びを受け取っていないので、婦人たちから促されただけでは足りませんでした。

徹夜祭の朗読で登場する婦人たちは、番兵が恐怖のために死人のようになる場面でも逃げ出さませんでした。復活したイエスから、いちばん最初に「ラザロ、出てきなさい」という決定的なことばをかけてもらうのもうなずけます。いざとなったときの女性の強さを、復活したイエスはよく知っていたのです。最初に墓を訪ねています。

託された使命は驚くほどのものではなかったかもしれませんが。しかし確かに、真っ先に使命を託されたのです。お集まりの皆さんの半分は女性だと思います。復活したイエスは、先に使命を託そうとしておられます。喜んで引き受ける準備はできているのでしょうか。

男性の代表として登場する弟子たちも、恐れに捉えられています。が、復活したイエスに開放してもらってからは数日の道のりをものともせずガリラヤに向います。時間がかかる使命を託されて、それを果たす

心の準備はできているでしょうか。170km 先まで歩くのに例えられるような、使命を果たし終えるまでの忍耐力、やる気は備わっているでしょうか。

中田神父は二度、エルサレムからガリラヤまで歩くような徒歩巡礼を体験させてもらいました。上五島に赴任していた時代、40代後半の頃です。同じ上五島に、福岡教区の今村教会に派遣されていた先輩が青砂ヶ浦教会に赴任していて、「大浦教会から今村教会まで、徒歩巡礼してみないか」と上五島の司祭全体に呼びかけてくださったのです。

今村のクリシタンたちは1865年、大浦で信徒発見の出来事が起こってからも、まだ信仰を公にできないでいました。今村に、クリシタンが潜んでいるらしい。その調査に、かつて派遣された人々がいて、1867年、信仰を守り継いだ人々を発見して大浦に帰ってロケーニュ神父にそのことを報告したのです。私たちは事前トレーニングをしばらく積んでから、三日かけて136kmの道のりを歩きました。実際には一部分電車にも乗りました。

今村エリアに入ると周りはたくさんの田んぼや畑があり、そこにはっきり今村教会が見えます。教会は見えるのに、いくら進んでもたどり着かないのです。体はへトへト、タクシーでも呼んで運んでもらいたい気分でした。しかしいよいよ近づくと、今村教会で私たちのために信徒の方々が小旗を振って待ってくれていたのです。

勇気百倍、力を今一度込めてたどり着き、皆で感謝のミサをささげました。徒歩巡礼の使命を与えてくれたのは直接的には先輩神父様でしたが、その使命の完成のために、はじめから終わりまで、復活したイエスがともにいてくださった素晴らしい体験でした。

「ラザロ、出てきなさい」と大声で叫ばれたイエスは今や復活し、私たちに使命を託そうとおられます。「ほどいてやって、行かせなさい。」それぞれ、使命を託され、いろいろな場所に行くのです。家庭に、職場に、社会に。中には、何百キロも離れた場所で、その使命に生きる者となります。

これから一人の中学生が堅信の秘跡を受けます。今、自宅から150km離れた場所で、復活したキリストを証しする使命を託されます。堅信の秘跡は、証しの力を授けてくださり、聖霊の賜物で満たしてください。今日お集まりの皆さんも、復活を祝い、復活を証しするために家から出てきましたが、150kmかけてここに来ている人が他にいらっしゃいますか？この勇気ある堅信受堅者を、私たちは祈りで支えてあげましょう。聖霊の七つの賜物が、豊かに注がれますように。

復活の主日(日中)(ヨハネ 20:1-9)



復活の主日(日中)(ヨハネ 20:1-9)

ペトロともう一人の弟子は、外に出て墓へ行った

あらためて、主の復活おめでとうございます。復活の主日日中の福音朗読は「空の墓」の出来事です。いくらなんでも中田神父が今年の聖なる一週間を貫くテーマに選んだ「ラザロ、出てきなさい」「ほどいてやって、行かせなさい」これが通用しないだろうとお考えでしょう。実は私もそう思いますが、少し、匂わせる箇所はあるようです。

マグダラのマリアが朝早く墓に行くと、墓から石が取りのけてあるのを見ました。慌てて戻った彼女はシモン・ペトロとイエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って告げます。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」(20・2)

それを聞いた二人の弟子は、外に出て墓へ行きました。「外に出て墓へ行った。」何かおかしいと思いませんか？「墓へ行った」だけで良いのではないのでしょうか。福音書が無駄なことを書いていないのであれば、「外に出て」は、「ラザロ、出てきなさい」の叫びを心で聞いたからではないのでしょうか。

すると、二人が墓へ行けば「ほどいてやって、行かせなさい」の声が待っているはずですが実際には声は無く、墓の中に亜麻布が置いてあり、イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてありました。(20・7参照) いったいどこに、「ほどいてやって、行かせなさい」は隠されているのでしょうか。

私は、最後にそのヒントがあると思っています。「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」(20・9) もし福音書が無駄なことを書かないのであれば、「それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。」(20・8) ここまでで十分でしょう。

彼ら二人は、きっとここで「ほどいてもらった」のです。互いに聖書の言葉を理解していないまま、聖書の言葉を背負い込んだまま、墓にやってきました。復活したらその場でお会いできるとか、声をかけてもらえるとか、前もって考えていたことがあったのでしょうか。それは与えられませんでした。それでも、シモン・ペトロとイエスが愛しておられたもう一人の弟子は、互いに相手が縛られていたものをほどいたので

す。

今、五感で感じられないけれども、イエスは確かに復活した。聖書の言葉は実現した。五感を頼るのではなく、聖書の言葉を頼りに、イエスの復活にたどり着いた。互いに、縛られていたものをほどいてみると、復活は五感を超える出来事だと気づいたのです。これは現代の私たちにとって幸いなことではないのでしょうか。

今年の四旬節黙想会に招いた説教師、個人的な面識はありませんでした。助任神父様たちはよく知っておられるようですが、本当に不思議

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

なめぐり合わせで招くことができました。聖書のゆるしの箇所を、ていねいに紐解いてくださり、私は見えないところで聞いておりましたが、まさにゆるしのテーマの疑問点を「ほどいてくださった」と思っています。

きっと、説教師は「ほどいてやって、行かせなさい」というイエス様の声に背中を押されて、私たちの黙想会に来てくれたのではないでしょうか。これはまさに、五感に頼らずに、聖書の言葉を頼りに、イエスの復活にたどり着く。その予行練習だったのだと思います。

時代を超え、場所を超えて、今も復活したイエスは「ラザロ、出てきなさい」と叫び、そのあと、私たちのうち誰かを使って、「ほどいてやって、行かせなさい」を実践しておられるのです。

復活節第2主日(神のいつくしみの主日)(ヨハネ 20:19-31)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。